

日本的文明による地球環境問題解決への提言

Proposed Solution Rooted in Japanese Civilization for Global Environmental Problems

21世紀はおそらく森の民・稲作漁撈民としての日本人の第8番目の危機の時代となるだろう。家畜の民・畑作牧畜文明の地球支配をものはやし止めることはだれにもできない。日本は西洋の家畜の民・畑作牧畜文明の超大国アメリカと、東洋の家畜の民・畑作牧畜文明の超大国中国にはさまれて、国家や民族のアイデンティティーの喪失の危機にさらされる可能性さえある。いやすでに未来を担う子供達の歴史の教科書から、日本人のアイデンティティーの原点である縄文時代の記述が削除されたことは、すでに日本民族のアイデンティティーの喪失がはじまっているということである。

かつて稲作漁撈民としての倭人が他の先住民族とその文化を根絶やしにしていったように、今度は縄文の森の民・弥生の稲作漁撈民としての日本人が同じ立場にたたされることになるのである。また、今の世界の各地で引き起こされている「文化の破壊」は、近い将来に日本でも引き起こされる可能性があるのである。

日本が21世紀にも世界に通用する普遍的な文明原理をもった国家として存続するためには、どうすればよいかを真剣に考えなければならない時にたちいたっているのである。

そのためには私は日本人が森の民・稲作漁撈民であることをはっきりと自覚し、「森の文明」と「米の文明」にこだわり、その植物文明の文明原理を核として日本国家と日本民族の未来像を構築し、「森の環境国家」¹として生き残るしかないと思うのである。

本稿ではそのための国家戦略として、以下の7つの戦略を提言する。

1. 地球観・生命観・歴史観・文明史観の転換
2. 森里海の連環を基本とした森の環境国家構築
3. 森里海の連環を核にした国土の防衛と保全
4. 環境戦士の育成と日本の環境倫理の啓蒙普及
5. 節度ある市場メカニズム社会の構築
6. 国際結婚の奨励と桃源郷構想の推進
7. 生命文明の時代の構築 である。

The 21st century will probably see the eighth crisis for the Japanese as "people of the forest", rice cultivators, and fishers. It is already too late to stop the global dominance by civilization rooted in crop and livestock farming. Sandwiched between two superpowers with such civilization, namely, the United States in the West and China in the East, Japan may even face the risk of losing its national and ethnic identity. Or, it can be viewed that the loss of ethnic identity among the Japanese has already started with the fact that discussions on the Jomon period, which is the source of Japanese identity, have been eliminated from history textbooks for young students—the leaders of tomorrow.

In the past, the ancient Japanese, who were rice cultivators and fishers, eradicated other indigenous ethnic groups and their culture. However, as people of the forest having their origin in the Jomon period and as rice cultivators and fishers whose tradition dates back to the Yayoi period, the Japanese are now going to find themselves on the losing side. Moreover, the destruction of culture currently seen in various parts of the world can also occur in Japan in the near future.

Japan has reached the point where serious rethinking is needed in order to find ways to continue as a nation with universal cultural principles that remain respected by the world in the 21st century. To realize such a nation, the Japanese must clearly identify their roots as people of the forest, rice cultivators, and fishers, side with civilization based on the forest and rice crop, draw a future image of the nation and its people with the principles of plant-based civilization at the core, and survive, building a forest-based, environmentally conscious country.

For this purpose, this article proposes seven national strategies: (1) the shifting of views on the globe, life, and history, including the history of civilizations, (2) the building of a forest-based, environmentally conscious nation with the links between the forest, sea, and human habitats at its foundation, (3) the protection of national territory centering on those links, (4) the training of "environmental protectors" and the education of Japanese-style environmental ethics, (5) the creation of society with a market mechanism suppressing greedy actions, (6) the promotion of international marriage and the concept of "Shangri-La living", and (7) the development of civilization that honors life.



1 | 地球観・生命観・歴史観・文明史観の転換

日本人が生き残るために、誰にでもできることは、これまでの地球観・生命観・歴史観や文明史観を変えることである。たんに言え、生きとし生けるものの命に畏敬の念を覚えた縄文を文明として認識することからはじめることである。そして新たな歴史観や文明史観に立脚して、この小さな地球の中で100億を越える人間がどうすれば生き延びることができるかを、そしてその中の一国家として日本民族がどう生き残れるかを、みんなが考えることである。この地球と人間がどのようにすれば共生できるのか。民族と民族が争うことなく限られた資源をどのように分かち合って生き延びるのか。そうしたことに貢献できない歴史観や文明史観は、少なくとも21世紀には無意味である。

これまでの人類文明史においては、文明を誕生させたのは、パンを食べ、ミルクを飲み、チーズや肉類を食べる家畜の民・畑作牧畜文明だけであったとみなされてきた。それは19世紀以降の欧米中心史観ともあいまって、当の欧米人はいまでもなく、コメや魚を食べるアジアの人々までが、人類文明史の真実であるかのような錯覚を持つにいたった。

しかし、地球環境問題の深刻化のなかで、欧米中心の文明史観に陰りが見えはじめた時、あたかもそれに呼応するかのよう、「米の文明」や「森の文明」の存在が注目されはじめ、その存在を立証する長江文明や縄文文明の存在がつつぎと発見されはじめたのである。しかし今日においても、長江文明や縄文文明の存在に対しては、すくなくとも日本の考古学者の多くは懐疑的である。いまだに欧米人のうちたてた文明史観の範疇の中でしか自国の歴史や文明を考えることができないのである。

長江文明の生業となった稲作は麦作に比べて単位耕地面積あたりの人口可容量が大きく、自然にやさしい農業であった。麦作と牧畜に立脚した文明が、森を徹底的に収奪し、川の水を干上がらせてしまったのに対し、稲作と漁撈をセットにした生業は、森と川と水田そして海の

水の循環系を持続的に維持した²。「森の文明」もまた森の中の命あるものすべてが、季節のうつろいに応じて永劫の再生と循環をくりかえしているように、再生と循環の世界観をその文明の基本におくものである。それは、終末の世界に向かって、一直線に発展するという直線的世界観に立脚した家畜の民・畑作牧畜文明とは、根本的に相違するものであった。

21世紀の世界は、限られた地球の資源を、100億に達しようとする地上の人間が、いかにわかちあい有効に利用するかを考えることなくして、人類文明の存続はありえない。

19～20世紀、地球の資源が無限にあるかに見えたその時代には、人類文明史は輝かしい未来に向かって直線的に発展するという世界観に立脚した畑作牧畜文明が、人類の繁栄に寄与できた。現代の文明概念はそのような世界観の上のうちたてられた文明概念である。その代表がカール・ヤスパースの枢軸文明論であった³。大量消費・大量生産のアメリカ文明もそこから生まれた。

しかし、21世紀は、限られた地球資源の中で、いかに人類がその繁栄を維持するかが問われる時代となる。そのときに必要な文明とは「稲作漁撈文明」のように自然からの収奪の度合いが小さく、かつ小面積の耕地で多くの人口を養うことができる生業に立脚した文明や、「森の半栽培と漁撈に立脚した縄文文明」のように森と川と海の再生と循環系を破壊することなく、資源の再生利用すなわちリサイクルを基本に人と自然が永続的に生きる文明原理を持つ文明なのである。稲作漁撈文明の代表としての長江文明や、森の文明の代表としての縄文文明にも、文明の資格を与えなければ、人類は生き残れないところにまできているのである。

この「森の文明」と「米の文明」を、その風土性の中で、醸成してきたのは、ほかならぬ日本人なのである。「森の文明」と「米の文明」は、21世紀の地球環境の危機の時代に、人類の普遍的文明原理のひとつになるだけの価値があることを、日本人は自信を持って世界に発信すべきである。

2 | 森里海の連環を基本とした森の環境国家構築

「森の文明」、「米の文明」の歴史観や文明史観に立脚して、日本がめざすべき未来の国家像とは、「森の環境国家」¹である。

IT革命も「森の環境国家」を構築するための手段であって目標ではない。日本列島改造論も手段であってどのような国家をつくるかの目標が明白でなかったため、結局公害列島日本を生み出した。明白な未来の国家像なしに、やみくもに目先の景気回復だけをめざして、IT革命をやっても、景気は向上しない。IT革命によって、どのような文明原理、文明システムを持つ未来の日本を構築するのかを国民の前にわかりやすく提示する必要があるのである。日本国や日本人が達成すべき目標とは何かを、政治家はわかりやすく提示しなくてはならない。

私は「森の文明」「米の文明」の文明原理をとり入れた森里海の連環を基本とした「森の環境国家」の構築を提案している。

地球環境問題の解決にはスウェーデンのカール・ヘンリック・ロベール氏が提唱したバックキャストिंगの手法⁴が注目されている。未来を予測する手法には、三橋規宏氏⁴も指摘しているように、過去から現在を見通し未来を予測するフォアキャストिंगとでもよぶべき手法と、近未来の進むべき目標値やビジョンを明白に設定して、その目標を達成するにはどうしたらいいかを考え、未来から逆に現在を規程し実行に移すバックキャストिंगという2つの手法がある。

過去から現在を見通し未来を予測するフォアキャストिंगとでもよぶべき手法は、過去を未来に外挿する従来の手法である。しかし、産業革命以降、ヨーロッパの列強は植民地を作り、奴隷を酷使しはげしい地球環境の破壊を行ってきた。それゆえ彼らにとっては、フォアキャストिंगの手法で未来を予測するためには、自然と人間が共生した美しい過去は、はるか遠い古代にまで遡ることが必要である。

それゆえ、近い過去に美しい過去を持たないヨーロッ

パの人々は、過去にかえるのではなく、自然と人間が共生した理想的な未来社会を想定して、その妄想の社会から現在を振り返り、その未来社会を実現するためにはどうしたらいいかを今から考え、社会経済システムや法体制を整備しようというバックキャストिंगの手法を開発したのではあるまいか。

ところが日本は違う。日本ではほんの40年前の1960年代に帰れば、そこには現実に森里海の連環を基本とした生きた豊かな自然と人間の共生の姿があった。ましてや100年前の江戸時代に帰れば、それは自然と人間の共存のパラダイスであった。自然と人間が共生する社会を構築しようと思えば、ほんの40年前の高度経済成長期以前の日本を復活させればいだけなのである。我々は世界に誇るべき美しい過去を持っているのである。

その自然と人間が共生したほんの40年前の豊かな世界(図1)を復活しようという取り組みが、兵庫県豊岡市のコウノトリを復活させる試みである⁵。中貝宗治市長のリーダーシップのもと、市民あげて有機栽培農業にとりくみ、みごとにコウノトリが復活した。そして有機栽培のコウノトリ米や有機栽培の大豆で作った豆腐は、市場価格の数倍の高値でも、品薄になるほどの人気なのである。土曜や日曜には大空を優雅に舞うコウノトリを見学するために、多くの観光客が観光バスを連ねて訪れている。

我々日本人はほんの40年前の自然を復活するだけで、自然と人間の共生の世界を取り戻すことができるのである。私はそれにバック・バック・キャストイングと名づけていたが、経済産業省の前田泰宏氏が「逆ビジョン」というすばらしいネーミングをしてくださった。

20世紀の世界をリードした国々の歴史とは、環境破壊の歴史であった。しかし、日本はほんの40年前の世界を復活させるだけで、自然と人間が共存可能な美しい世界をとりもどせるのである。ヨーロッパの人々が自然と人間が共存可能な理想的な世界を構想し、その実現にむかって社会経済体制や法律を制定しようという動きの中で、ほんの40年前の美しい過去を現在に復活させるだけで、自然と人間が共存可能な世界を実現できる日本人はなん

図1 40年前の兵庫県豊岡市にはコウノトリが群れていた（豊岡市提供）



と幸せな民族なのであろうか（図1）。

近い過去に体験したことを未来に再現することは、それを体験した人が生きており、人々の記憶にあるかぎり、それほど困難ではない。記憶にあり実体験のある過去を取り戻すことは、記憶にない理想的な構想を実現するよりも容易である。それ故、豊かな自然と人間が共生した記憶と実体験をほんの40年前まで持っていた日本人は、自然の復活において世界の最先端に立っていると言えるのである。

しかし、コウノトリを復活するには40年の努力が必要だったことを思うと、いったん失われた自然を復活することは容易ではないこともわかる。

「人類はどんな過去をもっているかによってその選択できる未来も決まる」。たとえば、建国以来、森を破壊し続けてきたような国の人々や、過去に一度も環境保全や森の再生をてがけたことのない民族に、森を復活しよう、水の循環系を守ろうといっても、それはウマの耳に念仏であろう。一方で、ヨーロッパの人々がなぜあそこまで環境保全に熱心になれるかといえば、それは彼らは17世紀の段階で90パーセント近くも失われたヨーロッパの森を、18世紀以降の植林によって復活させたという輝かしい過去を持っているからである。

日本人は縄文時代以来、森との共存が得意なのである。日本人は稲作に里山の森の資源を利用するという、世界でもまれな森の農業を確立することに成功していた。日本の未来のビジョンは、その森里海の連環を基本とした森との共生・共存の伝統の上につくられる未来都市⁶や国家ビジョン¹でなくてはならない。森は日本の国土の生命線であることを強く認識し、防災や国土保全にあたる。そして森は命の水の源である。森から生れる水の流域を基本にした森里海の連環を軸においた国土づくりこそが必要なのである。これだけの経済発展をとげながら、いまだに国土の70パーセント近くが森で覆われているのは、人類史の奇跡である。このすばらしい森の文明の文明原理を国土経営から日常生活にまで取り入れた「森の環境国家」の構築をまず日本の未来ビジョンの目標にあげたい。

3 | 森里海の連環を核にした国土の防衛と保全

「ようこそ日本」「観光立国日本」の政策によって、日本は韓国や台湾・中国の安いツアーの対象になり、日本の安売りがはじまった。日本の風景や国土の価値は下がり、品格のない国家へと今転落をはじめている。「日本が今買い」であるという世界の風潮を払拭するために、すべて

において日本的価値の底上げを目指すことが必要である。そのためには、

①地政学（ゲオポリティクス）を再興し国土の資源や国民の財産を守る政策を立案する

第二次世界大戦の敗戦で日本は地政学を放棄した。このために国土の防衛と保全に対してまったく配慮を欠いた脳天気な国家になってしまった。21世紀の地球環境の危機、資源とエネルギー、食料危機の時代に、こうした地政学の視点を欠如した国家はかならず崩壊する。日本のすばらしさを世界にアピールするだけでなく、しっかりと国土防衛戦略を構築することが必要である。

韓国人は今カンボジアに進出している。シムレアップに直行便を飛ばし、アンコールワットなどのツアーに年間数十万人が訪れている。しかし、彼らは韓国人の経営する旅行会社で韓国人の経営するホテルに泊まり、韓国人の経営するレストランで食事をして韓国人の経営する土産物屋でショッピングして帰るので、カンボジアにはほとんどお金は落ちない。同じことが今、福島県でおきている。福島県のゴルフ場が韓国人に買収され、多くの韓国人がやって来るが、かれらは地元には一円たりとも落とさないで帰る。

②日本の森林をすべて保安林として税制などの優遇措置をとり国土の保全にあてる

国土の防衛と保全の根幹にあるのは日本の森林である。天武天皇以来、日本のリーダーは国家ビジョンの根幹にたえず森をおいてきた。21世紀においても日本の国家ビジョンの根幹にあるのは森である。この森林を保安林として国家が優遇税制措置などを与えることによって、国土保全の根幹にすえることが肝要である。とりわけ21世紀は、水によって人類が危機に直面する時代である。その水を蓄える水源涵養林の保全は日本人の死活問題に直結している。ところが今、この水源林が外国資本に狙われている。三重県の度会郡では1,500ヘクタールもの山林が中国資本に買われた。狙いは日本有数の多雨地帯大台が原の水である。リゾート開発の名において鳥取県大山山麓や青森県の温泉などが外国資本によってつぎつぎ

と買収されている。彼らの狙いも水である。北海道のスキー場が外国人のリゾートとして売られ始めて以来、北海道の森がつぎつぎと外国資本によって買いあさられている。

③日本の水資源保安林を外国資源の買い叩きから守り森里海の連環を基本にした日本の国土政策を立案する

この外国資本の魔の手から日本の国土をどう守るのか。これらの外国資本の買い叩きは、日本人のライフ・スタイルの根幹を形成している森里海の水の循環システムを破壊する危険性がきわめて高い。早急に日本人はこの森里海の水の循環システムを破壊するような外国人による日本国土の買収に歯止めをかける規制法を立案すべきである。

4 | 環境戦士の育成と日本的環境倫理の啓蒙普及

地球環境の危機はもはや人類の生存の危機をおびやかすまでに肥大化し、人類はどのようにすればこの地球上で生き残れるかを真剣に模索しなければならないときになっている。人間以外の生きとし生けるものの命は危機に瀕し、生物多様性はいま急速に失われようとしている。この地球環境問題の解決には、資源循環型の技術開発やライフ・スタイルの変化、さらには自然再生の技術などいくつかの希望ある取り組みもなされているが、その根本にあるのは、人類の心の問題である。

人類がなだれをうって地球環境問題の解決に取り組むには、自然との関係において人類が欲望の暴走をコントロールできる心よりどころをとりもどすしかないのである。物質や金銭ではなく、村上和雄氏⁷のいうサムシング・グレート⁸の存在をひそやかに感じ、命の輝きに感動する心を人類がとりもどさないかぎり、地球環境問題の解決は不可能なのである。その意味において宗教が人類の未来に果たすべき役割はきわめて大きなものがある。そのためにはまず未来を担う若者の学校教育の中に宗教教育をとりいれ、日本人の魂、日本人の心を植えつけることが必要である。

世界第2位の経済大国として物質的にめぐまれた暮ら

しを送る私たち日本人が、世界にむかって発信できることは、神や仏の存在を山や川の大地と自然にひそやかに感じ、地球に祈る心である。その心を伝える伝統的な仏教や神道はいうにおよばず、新たに勃興した近代宗教の関係者をもふくめて、あらゆる日本の宗教関係者が今こそ地球環境の保全と持続型の新たな文明社会の構築のために、ともに教義の対立やセクト主義を乗り越えて協力しないかぎり、人類は破滅の道を回避することはできないのである。

鎮守の守を守ろうという千年の森運動もそうであるが、どうしても地球環境の保全には、日本人が長らくつちかってきた伝統的世界観とのかかわりを無視できない。しかし、第二次世界大戦の敗戦によって、アメリカから押しつけられた法制度のために、国家やそれを担う官僚は、いかなる政策からも宗教性を排除する方向性をとらざるをえない。そのために多くの環境保全のプロジェクトが、魂のない張り子のトラになっているのである。

しかし、縄文時代以来つちかわれてきた自然への畏敬の念や再生と循環の世界観、多神教の世界観は縄文時代以来の日本人の伝統的な日々の暮らしの中で温存されてきたものなのである。日本の神道や仏教は稲作漁撈民の世界観を反映したものなのである。その日本人の魂の原郷とでもいうべき伝統的な宗教的世界は神仏習合にあるというのが、私の考えである。

しかし、いくら日本人だけが高潔なサムシング・グレートを感じ、欲望の暴走をコントロールする心の方策を身に着けても、世界の人類が変わらない限り、地球環境問題は解決できない。それゆえ私たちは世界の宗教者との会議をも頻繁に開催し、キリスト教やイスラム教など一神教の国々の人々との対話を深め、伝統的な日本人がもつ神仏習合思想が人類の未来に果たすべき役割を世界に理解していただき、その啓蒙・普及に勤めるとともに、一神教の人々とも共に手をたずさえて地球環境問題の解決に邁進する。

このような「森の環境国家」の構築に、多くの企業やボランティア団体が取り組みはじめている。国家はこの

ような企業や団体に、税制面での優遇措置など積極的な支援をこうじるとともに、環境戦士を育成し、必要がある。

戦後日本をリードしてきたのは、問題解決型の秀才であった。目先の利にするどい問題解決型の秀才が発する言葉は、それはお金もうけにつながりますかということである。政府の委員会でもこうした発言が多々みられた。

しかし、地球環境問題を解決するための活動は、こうしたお金もうけにはつながらないものが多い。大半の問題解決型秀才は、金がもうからなければいくら理念が高くとも人間は動かないという発想をする。しかし、近年の若者の中には、お金もうけにならなくても、自分以外の他者（人のみでなく自然も含む）の利益のために働くことに生きがいを見つけることができる人々が生まれはじめている。NGOやNPOの隆盛がそれを物語っている。さらに地域通貨へのとりくみはじまり、グローバルスタンダードの市場原理とは異質の経済構造の構築への萌芽もみられる。豊かさを手にした今、人々はお金もうけよりも生きがいを重視するようになったと思う。

一流大学を出て官僚になり出世したいという欲望を持つ問題解決型秀才に対して、他者の利益のために生きたいという利他の精神を持つ若者も多い。いや一流の大学を出た若者のなかには、地域にでかけてエコビレッジの構築など実際の活動にたずさわることによって最高の価値と喜びを見出す若者が多く輩出しはじめている。私の身の回りにも、カナダの大学で博士号を取得した若者でありながら、論文を書く研究者というより、実際の限界集落でエコビレッジの再生にとりくみたいと、自らNPOの活動を選ぶ若者が増え始めている。そうした若者の中に、最澄や空海に匹敵する「おちこぼれ型の人材」⁸がかならずいるはずである。

そしてこうした利他の精神に目ざめた若者を、森の環境国家日本の未来を担う環境戦士として育成し、生活を保障し、環境保全のレンジャーや地方の防災にあたらせ、高齢化した地域をよみがえらせていくことが必要なのである。そうした若者こそ市場原理を超越し、新たな生命

文明の時代を構築する担い手になることができる人々なのである。

さらに願わくば、こうした環境戦士たちが、稲盛和夫氏⁹のいう「利他の行」、「世のため人のために生きること」に最大の喜びを見出し、地球防衛植林隊を組織し、世界を森で埋め尽くす運動の展開したり、地球美化運動隊を組織し世界各国でトイレ掃除を行ったりして、世界の人々の心を変えることに大きく貢献してくれたら、地球は新たな世界へと大きく回転しはじめるだろう。

5 | 節度ある市場メカニズム社会の創造

いうまでもなく資本主義社会の構築にはキリスト教の倫理的規範が重要な役割を果たした。差別化は一神教が抱えた原罪である。差別化がなければ、唯一絶対の神への信仰など打ち立てることができなかった。その一神教を背景とした市場原理主義も、差別の論理を内包した経済理論だった。金子晋右氏¹⁰はアメリカの格差拡大社会の背景にはキリスト教原理主義が隠れていることを指摘している。

この地球環境と人類の危機に直面して、自然と人間が共存可能な新たな経済社会を構築するためには、キリスト教のみでなくそれ以外の宗教観をも取り入れた新たな世界観に立脚した経済社会を構築することがぜひとも必要である。新たな宗教観に立脚した新しいビジネスとは何か。中谷巖氏¹¹が指摘される「悪魔のシステム」としての市場原理主義に変わる新たな未来を救済する経済思想は、日本人が伝統的にもってきた神仏習合の思想の中にこそ、あると私は確信する。この地球を覆おう市場原理主義の横暴を超克しないかぎり、地球環境問題の解決はありえない。中谷氏が指摘するように「世界中で起きている環境破壊もまた、市場原理主義優先の思想が生み出したもの」なのである。

市場原理主義の横暴を超克するためには、銀行には投資しないという節度をもうけたイスラムのように、日本は地球環境を破壊するようなことから、あるいは水や食料など人間の命にかかわることからは投資しないとい

うような節度ある市場メカニズムの模範を示すことが必要である。

さらに外国人によるゴルフ場の買い叩きや国土の買い叩きを規制するとともに、日本の風景の価値を再発見する教育を行いことを通じて、たとえば東北地方のホテルは最低でも1泊2食で10万円を取ることができる観光地に高付加価値化すべきであろう。そのためには、政府の支援や税制上の保護を与え、日本的価値の底上げ戦略を展開しなければならない。

そのためには地方の農協と信用金庫が協力して農山漁村の活性化をはかることが必要である。日本人に安全な食を供給するためにもこのことはぜひとも実行いただきたい。そして太陽光発電を中心とする自然エネルギーの開発利用を促進し、個別分散のエネルギー完結システム型社会を構築することはいうまでもないことである。

6 | 国際結婚の奨励と桃源郷構想の推進

日本人は世界の中でDNAの多様性がもっとも大きな民族であると言われている。それは日本民族が特定の集団による大量虐殺を過去において体験しなかったことを意味する。日本語を話し、日本食を時には食べ、この美しい日本列島に暮らせば日本人になれるのである。皮膚の色は何色でも構わないし、どのような民族の血がながれていようとかまわない。これが日本民族の特質なのである。このことから国際結婚には優遇措置をあたえるなどして、国際結婚を奨励し若者を育成することを提案する。

一方、高齢者が生き生き暮らせる社会を構築するために、「日本列島桃源郷構想」を展開する。老人であっても社会に責任をもって自立的に暮らし、自然を守ることに生きがいを持ち、美しい風土の中で自然をむさぼり尽くすのではなく、おだやかにゆったりとくらす桃源郷を日本列島の中に構築することができれば、高齢者がいきいきと暮らせる日本が創造できるだろう。稲作漁撈民が最終的に目指したのも桃源郷であった。桃源郷とは過去に還ることである。江戸時代の過去に還ることができなくとも、40年前の過去に還る暮らしを老人が地方において

積極的に営み、桃源郷の構築に参加することができれば、日本の豊かな自然と文化を後世に守り伝えることができるであろう。そのためには医療や介護施設が地方において充実することが必要であり、嫁不足の地方の農山村に国際結婚によって諸外国からやってきた人々と高齢者がともに心をかよわせ、国際色豊かな桃源郷を創造することができれば理想である。

7 | 物質エネルギー文明の時代から生命文明の時代へ

17世紀の科学革命の原動力になったのは、ニュートンの万有引力の発見であった。これが物質・エネルギー文明の起爆剤となり、人類は物質的豊かさを享受できた。R.ベーコンの自然を支配し人間の王国をつくらうという自然支配の思想、R.デカルトの「我疑うゆえに我あり」という自然と人間へのかぎりない懐疑の思想が、この物質・エネルギー文明の潮流を創造した。科学の世界においても、理学部でもっとも優秀な学生は物理学や数学にすすみ、生物学や地理を選択する学生は落ちこぼれた。

しかし、21世紀はそうした物質・エネルギー文明が終焉する時代となるだろう。私¹²は2050～2070年が現代の物質・エネルギー文明が崩壊する時代であると予測している。これまでの地球上に出現したいかなる文明も永遠不滅の文明など存在しなかった。すべての文明は崩壊した。現代の物質・エネルギー文明も例外ではあるまい。

いかなる文明も崩壊する。永遠不滅の文明は存在しない。地球環境を激しく収奪する現代の物質・エネルギー文明は、2050～2070年に崩壊するということを前提に、人類は今から新たな文明の創造に立ち向かわなければならないのである。その新たな文明とはどのようなものか。それは地球上の生きとし生けるものの命が輝く「生命文明」であると私¹³は考えている。

物質・エネルギー文明の精神的支柱となったのは一神教のキリスト教だった。そしてその物質・エネルギー文明の豊かさを保証する経済思想の根幹にもキリスト教が

存在した。しかし、21世紀の新たな生命文明の精神的支柱となるのは、生命の輝きを見つめる多神教、神仏習合の思想であって、生命文明の豊かさを保証する経済思想も、その多神教、神仏習合の思想の中から生まれてくるものと確信している。

これまで私達はユートピアと桃源郷を同じものとみなしてきた。しかし、その2つは根本的に異なる性質のものであることがわかった。

生態史的にはユートピアは動物文明を代表する畑作牧畜民の理想郷であり、桃源郷は植物文明を代表する稲作漁撈民の理想郷であった¹。そして前者のユートピアが未来指向型の性格を強く持っているのに対し、後者の桃源郷は過去への回帰型の性格を強くもっているのである。そしてユートピアを求める人々は、環境問題の解決にさいして、理想的な未来社会を妄想し、未来から現在に戻り、その実現に向かって努力するバンクキャストイングの手法を考え出した。これにたいし、桃源郷を求める人々は、美しい過去を未来に再生するフォアキャストイングの手法によって、この地球環境問題を解決しようとしている。

人類はこれまでユートピアを求めて、新たな文明を創造してきた。新天地にユートピアを構築するには、無限の資源と無限の大地が必要である。しかし、地球の資源が有限であることが誰の目にもはっきりとし、新天地として開拓できる台地がもはや南極と北極そして海底にしか存在しなくなった現在においては、もはや新天地にユートピアを構築できなくなった。むしろ桃源郷を求める思想が重要になってきたのである。人類がこの小さな惑星地球で生き残るためには、この地球の中でユートピアを求めつづけるのではなく、この地球を桃源郷に変え環境列島日本を構築する必要があるのである。

大気中のCO₂濃度を減少させようとする京都議定書や、河川を昔の姿にもどそうという自然再生のプロジェクトは、まさに桃源郷にもどろうとする過去への回帰プロジェクトなのである。しかし、現実には京都議定書は大きな役割を果せていないし、自然再生のとりくみも微々た

るものである。この過去へ回帰するプロジェクトを本格化させるためにも、稲作漁撈文明¹⁴のパワーがよみがえる必要があるのである。

地球の資源が有限であり、もはやこれまでのような右肩上りの経済成長も期待できず、地球環境の破壊のなかで食糧危機が深刻になる可能性が高い21世紀の未来構想は、畑作牧畜民と同じようなユートピア構想では、はっきりと限界がある。すなわちユートピアを求め続けるバックキャストの手法では限界があるということである。この東洋の稲作漁撈民が求めつづけてきた桃源郷、美しい過去を未来に再生するフォアキャストの手法こそ、限られた資源の中で、100億近い人間がひしめきあって生きなければならない21世紀の地球と人類を救済できる手法であると私は考えるのである。

これまで政治も経済も社会、そして歴史家や文明史家でさえもユートピアを探し求めてきた。しかしもはやそれにははっきりと限界があることを認識する必要があるだろう。ユートピア構想から桃源郷構想へと、人類の理想郷の中心軸をシフトする必要がある。それはとりもなおさず、文明の形態を無限の資源を前提とした「自然＝人間搾取系の文明」の畑作牧畜の文明から、限りある資源を前提とした「自然＝人間循環系の文明」の森の文明・稲作漁撈文明へと大きく転換させることなのである。

日本の高度経済成長は、アメリカやヨーロッパ並みにというはっきりした目標があった。日本人はその目標を達成するにはどうすればいいかを考え、そして実行に移して、経済成長をなしとげた。それは地球環境問題を解決するうえにおいても同じことがいえる。めざすべき目標値を明確にし、それを達成すればいかに人々に幸福と豊かさが見られるかを明白にした目標を設定することが必要なのである。しかし、なかなかそうした未来のビジョンが描けないから地球環境問題の解決が遅々として進まないのである。地球環境問題を解決できる未来のビジョンは、実は美しい過去にあるのである。

川の水を30年前の美しさにもどす。鳥や虫の数を20年前の量にもどす。森の面積を20年前にもどす。こうし

た目標を設定し、それを実現するためにはどうしたらいいかを考え、実行に移すことが未来への国家ビジョンの森の環境国家の構築につながるのである。それは過去に回帰する桃源郷を求める稲作漁撈民の生き方そのものなのである¹⁴。

8 | 結論

(1) 新たな地球観・生命観・歴史観・文明史観を構築せよ

日本人が生き残るために、誰にでもできることは、これまでの地球観や生命観、歴史観や文明史観を変えることである。「森の文明」と「米の文明」は、21世紀の地球環境の危機の時代に、人類の普遍的文明原理のひとつになるだけの価値があることを、日本人は自信を持って世界に発信する。

(2) 逆ビジョンこそ日本のお家芸

日本人は縄文時代以来、森との共存が得意なのである。日本人は稲作に里山の森の資源を利用するという、世界でもまれな森の農業を確立することに成功した。日本の未来のビジョンは、その森との共生・共存の伝統の上につくられる未来の国家ビジョンでなくてはならない。それは過去を未来に復元する「逆ビジョンの方法」で実現可能である。「確かな未来はなつかしい過去にある」のである。

(3) 国土の防衛と保全に対する地政学の復興

①地政学（ゲオポリティクス）を再興し国土の資源や国民の財産を守る政策立案

②日本の森林をすべて保安林として国土の保全にあてる 税制などの優遇措置、とりわけ森林資源・水資源を中心とする国土の保全が重要

③日本の水資源保安林を外国資源の買い叩きから守るために、森・里・海の循環を基本にした日本の国土政策を立案

(4) 新たな日本的倫理の創造と啓蒙普及

①環境戦士・環境レンジャーの育成

地方の市町村に環境戦士・環境レンジャーを配置し、

環境保全と防災にあたらせる

さらには外国人による不法な開発などを取りしめる役割も課す

②そのためには学校教育に宗教をとり入れ日本人の自然と生きる心を若者に教育する

③日本人の環境倫理の世界への普及

地球防衛植林隊を組織し世界を森で埋め尽くす運動の展開

地球美化運動隊を組織しトイレ掃除をとくに中国で行う。中国人の心を変えるのはこれしかない。さらに若者の国際結婚を奨励し日本的価値を子や孫につたえることも有効な手段となるだろう。

(5) 節度ある市場メカニズム社会の構築

①銀行には投資しないという節度をもうけたイスラムのように、日本は地球環境を破壊するようなことから、あるいは水や食料など人間の命にかかわることがらには投資しないというような節度ある市場メカニズムの模範を示す

②外国資本によるリゾート開発の制限

韓国人や中国人によるゴルフ場の買い叩きや国土の買い叩きを規制する

韓国人や中国人の安いツアーを東日本は受け入れない

という規制を設ける

日本の風景の価値を再発見する教育を行い、東北地方のホテルは最低でも一泊2食で10万円取る政府の支援や税制上の保護

③食料の自給戦略

地方の農協と信用金庫が協力し地域の水・食料資源の開拓にあたらせる

食べる文化から食べない文化を創造。イスラムの断食のように中高年は断食する

④エネルギー自給戦略

太陽光発電を中心とする自然エネルギーの開発利用を促進し、個別分散のエネルギー完結システム型社会を構築

(6) 桃源郷構想の推進

少子高齢化社会にむけてまず国際結婚を奨励し、国際結婚には優遇措置を与える。老人が生き生きらせる桃源郷構想を推進する

(7) 生命文明の時代を構築する

①生きとし生けるものの命が輝く生命文明の時代を構築する

②日本的価値の底上げ戦略 日本的価値に立脚した文明世界を構築する

【注】

¹ 安田喜憲：『日本よ森の環境国家たれ』中公叢書 2002年

² 安田喜憲：『魚食の文明・肉食の文明』日本研究 20周年特集号 2007年

³ 安田喜憲：『一神教の闇』ちくま新書 2006年

⁴ 三橋規宏『環境再生と日本経済』岩波新書 2004年

⁵ 鷲谷いづみ編：『コウノトリの贈り物』地人書館 2007年

⁶ 平野秀樹：『森林理想郷を求めて』中公新書 1976年

⁷ 村上和雄：『サムシング・グレート 大自然の見えざる力』サンマーク出版 1999年

⁸ 安田喜憲『東西文明の風土』朝倉書房 1999年

⁹ 稲盛和夫：『生き方』サンマーク出版 2004年

¹⁰ 金子晋右：『地球環境問題と文明の衝突』論創社 2008年

¹¹ 中谷巖：『資本主義はなぜ自壊したのか』集英社 2008年

¹² 安田喜憲編著：『巨大災害の時代を生き抜く』ウエッジ選書 2005年

¹³ 安田喜憲：『生命文明の世紀へ』第三文明社 2008年

¹⁴ 安田喜憲：『稲作漁撈文明』雄山閣 2009年